SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

教師のライフコースと家庭科の学習指導観との関連

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-03-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小清水, 貴子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00006496

教師のライフコースと家庭科の学習指導観との関連

The Relationship between Home Economics Teachers' Life Course and Educational Guidance

小清水　貴子[*1]
Takako KOSHIMIZU

（平成23年10月６日受理）

１．はじめに

授業は学習者，教師，教材・教具，学習環境などの要素から成り立ち，教師は授業を設計し，実践する役割を担っている。授業設計において，教師は，学習目標の設定，学習者の学習状況の分析，学習指導方法の検討などを行っている。こうした授業を設計する一連の流れを，システム思考でとらえたインストラクショナルデザイン[1)]ではADDIEモデルを提案している。ADDIEモデルは，まず初めに，学習者の特性や前提知識，教える内容を分析し，目標を明確にし（「分析」Analysis），つぎに，教材研究を行って，教える内容の見取り図をつくり（「設計」Design），単元の計画や授業の流れをまとめ，教材や学習環境を準備し（「開発」Development），指導案に基づいて，用意した教材を使って実際に授業を行い（「実施」Implement），授業後の検討会等で授業の振り返りをする（「評価」Evaluation）という一連の授業づくりの手順を示している[2)]。「目標と指導と評価の一体化」の観点に立てば，授業の設計の中核をなすのは学習目標である。ADDIEモデルでは，学習目標を適切に定める第一段階の「分析」が，授業設計において重要な作業であることが示唆されている。

家庭科の教科目標は，「主体的に家庭生活や地域の生活を創造する能力と実践的な態度を育てる」[3)]である。ADDIEモデルの第一段階の「分析」を家庭科の授業の観点でみると，学習目標を明確にするために，教師は，学習者の生活実態や生活に関する前提知識，つまり，子どもの生活実態から家庭科の授業を構想することを求められる。

家庭科の学習対象は生活そのものであり，教師もまた，生活者の一人である。先行研究において，高木[4)]は，家庭科教師に求められる資質として，社会の一員としての「人間性」「教養」，教師としての「教職意識」「子どもへの愛情」「生活者としての姿勢」をあげている。中でも「生活者としての姿勢」は，家庭科教師に求められる資質をより鮮明に示しているものであり，「家庭生活に関し，常に改善向上の意欲を持ち，計画的に実践できる態度である」「常に新しい事柄について研究をし，指導力の向上を図る努力をしている」「生活改善の意欲実行力に富む」などを，その具体例として示している。また，家庭科教師に求められる能力に，「社会変化への対応」を挙げている。この具体例として，「時代の変化に対応した衣食住生活や家庭生活全般に関する広い知識と豊かな生活経験」「生活の充実向上を図ろうとし，創意工夫できる能力」「問題解決能力」「グローバルな視点での行動力」などをあげている。つまり，家庭科教師に対して，生活者としての姿勢や社会変化への対応を身につけつつ，学習指導を行うことが求めら

[*1]静岡大学教育学部

れているといえる。また，鶴田[5]も「生活主権者としての能力は，家庭科教育で生徒に育成しようとする能力であり，指導者のそれが問われる必要がある」と述べている。

したがって，生活を学習対象とする家庭科の授業においては，子どもの生活実態を教師がどのように判断するか，子どもの生活のとらえる教師の視点が，学習目標の設定や指導内容に大きく影響するといえる。そして，この子どもの生活実態をとらえる過程において，教師自身が持つ生活者としての姿勢が関与すると考えられる。しかし，先行研究をみると，家庭科教師の教科観と学習指導とのかかわり[6]に関する研究は散見されるものの，一生活者としての家庭科教師の生活上の経験と学習指導とのかかわりに関する研究はほとんど行われていない。

そこで本研究では，高等学校家庭科教師を対象に意識調査を実施し，教師のライフコースと家庭科の学習指導観との関連を明らかにすることを目的とする。

２．研究方法

2.1. 調査時期および調査対象

調査時期は2010年7月，調査対象はＦ県南部の高等学校家庭科研究部会に所属する家庭科教師27名である。教員歴の平均年数は20.0年であり，全員が女性である。対象者の年代，婚姻経験，子育て経験，介護経験の有無については，表１に示したとおりである。

表１　調査対象者　（人）

年代	人数	教員歴 平均年数(年)	婚姻経験		子育て経験		介護経験	
			有	無	有	無	有	無
30 代以下	12	13.5	9	3	9	3	0	12
40 代	8	22.8	5	3	3	5	3	5
50 代	7	29.3	4	3	2	5	4	3
計	27	20.0	18	9	14	13	7	20

2.2. 調査方法

調査項目は，家庭科の授業を通してとくに生徒に学んでほしいこと，家族・保育・高齢者・生活設計の学習目標とその目標を設定した理由，各分野の学習指導の必要性，教師のキャリア志向に関する項目である。

各分野の学習指導の必要性については，「家庭科の授業において，以下の学習はどのくらい必要だとお考えですか」という設問を設定し，家族・家庭分野（7項目），保育分野（5項目），福祉分野（3項目），食生活分野（5項目），衣生活分野（6項目），住生活分野（4項目），消費生活分野（4項目）の計34項目に対して，とても必要，まあ必要，あまり必要ではない，必要ないの4件法で回答を求めた。

教師のキャリア志向については，「消費経済などの講義の指導内容に関すること」「調理・被服などの実習の指導内容に関すること」「グループワークやロールプレイングなどの指導法」「ICT 活用など情報機器を使った指導法」「他の教師の授業実践を聞く」「他の教師がどんな教材を使っているのか知る」の６つのことがらについて，自分自身にとって，これらの教員研修がどのくらい必要であるかについて，とても必要，まあ必要，あまり必要ではない，必要ないの4件法で，回答を求めた。

また，家庭科の授業を通してとくに生徒に学んでほしいこと，家族・保育・高齢者・生活設

計の学習目標とその目標を設定した理由は，自由記述で回答してもらった。

2.3. 分析方法

数量的データは統計的処理および分散分析を行い，年代，婚姻経験，子育て経験，介護経験，自身のキャリア志向と学習指導観との関連を検討した。また，自由記述形式の調査項目から得られた質的データは，考察を行うための補足データとして用いた。

３．結果および考察

3.1. 年代と学習指導観との関連

年代別にみた学習指導観との関連を表２に示した。分散分析の結果，年代による統計的有意差がみられた項目は，「2.自分らしく生きること（$F(2,24)=2.64$，$p<.01$）」「13.高齢者の心身の特徴と生活（$F(2,24)=3.10$，$p<.01$）」「15.高齢者を支えるしくみ（$F(2,24)=2.86$，$p<.01$）」「21.被服の素材や被服材料の性能（$F(2,24)=4.72$，$p<.01$）」「23.衣服の簡単な補修（$F(2,24)=3.55$，$p<.01$）」「28.室内環境の整備と住まいの維持管理（$F(2,24)=3.14$,$p<.01$）」であった。「2.自分らしく生きること」「13.高齢者の心身の特徴と生活」「15.高齢者を支えるしくみ」「21.被服の素材や被服材料の性能」「28.室内環境の整備と住まいの維持管理」では，40代，50代，30代以下の順に学習指導の必要性が低くなることがわかった。また，「7.生活設計（$F(2,24)=2.59$，$p<.10$）」「30.住まいと環境のかかわり（$F(2,24)=2.55$，$p<.10$）」「34.クレジットのしくみと多重債務（$F(2,24)=2.58$, $p<.10$）」の３つは年代による差異に有意傾向がみられ，「7.生活設計」「34.クレジットのしくみと多重債務」では，40代，50代，30代以下の順に学習指導の必要性が低くなった。先の結果と合わせて，40代ではより多くの項目の学習指導の必要性を感じていることが明らかになった。

年代にかかわりなく学習指導の必要性が高かったのは，食生活分野と保育分野であった。食育や保育体験学習は家庭科教育の現代的な課題であり，新学習指導要領にもその重要性が取り上げられている。現代的な課題に対しては，自身の生活経験にかかわらず，学習指導の必要性を感じているといえる。

また，多重分析の結果，30代以下の教師と40代の教師の間で，5％水準で有意差がみられた項目は，家族・家庭分野の「2.自分らしく生きること」「7.生活設計」，福祉分野の「13.高齢者の心身の特徴と生活」「15.高齢者を支えるしくみ（制度，支援）」，衣生活分野の「21.被服の素材や被服材料の性能」，消費生活分野の「34.クレジットのしくみと多重債務」であった。

家族の学習に関する記述をみると（表３参照），30代以下では「家庭の機能と家族関係」「家族法」，40代では「家族の理想的な在り方」「自分で創っていく家族」，50代では，「現代家族の諸問題と社会の在り方」「個と家族の関係について」などの記述であった。30代以下では家族の機能や家事労働，40代では自分で創っていく家族や家族の大切さ，50代では個と家族や現代家族の諸問題など，年代別に家族を扱うテーマの視点が少しずつ異なっていた。

つぎに，高齢者の学習に関する記述をみてみる（表３参照）。30代以下では「高齢者の生活課題と現状」「高齢者を取り巻く現状」，40代では「社会保障制度の取組み方」「ノーマライゼーション」，50代では「高齢者としての生き方」「生き甲斐の作り方」「介護保険」などであった。30代以下の教師は高齢期に最も遠く，教師自身が自立したばかりであると考えられ，高齢者の特徴や高齢者を支えるしくみに主眼が置かれていた。しかし，50代では，高齢者としての生き

表２　年代別にみた学習指導観

	学習項目	30 代以下（N=12 ）	40 代（N=8 ）	50 代（N=7 ）	t 検定
家族・家庭	1.自分をみつめること	3.50	3.50	3.43	ns
	2.自分らしく生きること	3.25	3.75	3.43	2.64**
	3.いろいろな家族，家族の多様性	3.33	3.38	3.29	ns
	4.ワーク・ライフ・バランス	3.33	3.38	3.29	ns
	5.男女共同参画社会	3.08	3.50	3.43	ns
	6.ジェンダー	3.00	3.38	3.14	ns
	7.生活設計	3.08	3.50	3.43	2.59+
保育	8.妊娠や出産のしくみ	3.42	3.75	3.71	ns
	9.避妊や人工妊娠中絶	3.17	3.63	3.57	ns
	10.子どもの成長・発達	3.50	3.88	3.29	ns
	11.社会みんなで子育てをしていくこと	3.58	3.75	3.57	ns
	12.愛情をもって子どもを育てること	3.58	3.75	3.71	ns
福祉	13.高齢者の心身の特徴と生活	3.17	3.75	3.29	3.10**
	14.高齢者の介護	3.08	3.63	3.00	ns
	15.高齢者を支えるしくみ（制度，支援）	3.17	3.75	3.43	2.86**
食生活	16.栄養のバランス	3.50	3.63	3.71	ns
	17.食品の選択や管理	3.50	3.63	3.71	ns
	18.自分で調理ができること	3.75	3.75	3.86	ns
	19.食糧と環境とのかかわり	3.42	3.50	3.57	ns
	20.食文化	3.25	3.50	3.29	ns
衣生活	21.被服の素材や被服材料の性能	2.92	3.63	3.29	4.72**
	22.洗濯などの被服管理	3.42	3.75	3.29	ns
	23.衣服の簡単な補修	3.58	4.00	3.43	3.55**
	24.自分で衣服の縫製ができること	2.42	2.63	2.43	ns
	25.被服資源と環境のかかわり	3.08	3.13	3.14	ns
	26.衣文化	2.83	3.00	2.57	ns
住生活	27.間取りと住まい方の計画	3.00	3.13	2.57	ns
	28.室内環境の整備と住まいの維持管理	2.83	3.50	2.71	3.14**
	29.防災など安全な住まい方	2.92	3.50	2.86	ns
	30.住まいと環境のかかわり	2.92	3.50	2.86	2.55+
消費生活	31.家計の管理や資産運用	2.92	3.50	3.14	ns
	32.給与明細の見方	2.83	3.25	3.29	ns
	33.消費者の権利と責任	3.33	3.88	3.29	ns
	34.クレジットのしくみと多重債務	3.25	3.88	3.43	2.58+

+p<.10　*p<.05　**p<.01

方や生き甲斐の作り方など，高齢期に近い教師自身の生活経験が学習内容に反映されている様子がうかがえた。つまり，年代別に高齢者の学習を扱う切り口が異なるといえる。

衣生活分野の「23.衣服の簡単な補修」については，30代以下と40代，40代と50代の間で，5%水準で有意差があった。衣服の簡単な補修に関する学習は，40代の教師がもっとも必要性を感じているが，30代以下と50代の教師は必要性を感じていなかった。また，「24.自分で衣服の縫製ができること」は，年代に関係なく，全項目のなかで最も学習指導の必要性が低かった。それらの要因として，日常生活において裁縫技術を使う機会の減少や，新学習指導要領における被服実習に関する学習内容の減少が考えられる。

3.2. 婚姻経験と学習指導観の関連

つぎに，教師の婚姻経験と学習指導観の関連を表４に示した。婚姻経験有り群は18名で，無し群は9名である。学習指導観について，両群の差異はほとんどみられなかった。

表３　家族・高齢者の学習目標（自由記述）

	家　　族	高　齢　者
30代以下	・家族とのかかわり ・家族の多様性 ・家庭の機能と家族関係 ・家族法 ・家庭を支える労働 ・家庭生活と職業労働の調和（ワーク・ライフ・バランス）	・共生し合う社会づくり ・高齢者の生活課題と現状 ・高齢者を支えるしくみ ・高齢者を取り巻く現状
40代	・いろいろな家族，変化する家族 ・自分らしく生きる ・家族の一員としての自覚 ・家族の理想的な在り方 ・虐待等，家族問題の対処方法 ・様々な家族があるということ ・男女共同参画社会 ・自分で創っていく家族 ・家族の大切さ ・家族をめぐる諸問題（社会的なこと）	・高齢者の心身の特徴 ・人間らしく最期を迎えることの重要性 ・社会保障制度の取組み方 ・加齢による体や心の変化について ・ノーマライゼーション ・生活の質 ・高齢者の尊厳 ・介護制度や支援
50代	・家族の多様性 ・現代家族の諸問題と社会の在り方 ・個と家族の関係について ・様々なライフコース ・ジェンダー ・男女共同参画社会 ・民法 ・家族だからこそ乗り越えられる問題があること	・高齢者としての生き方 ・生き甲斐の作り方 ・心理的特徴（生涯発達という概念） ・福祉の在り方 ・介護と心身の特徴」 ・年齢を問わず共存していくこと ・介護保険

統計的な有意傾向がみられた項目は，つぎの３つである。まず，食生活分野の「19.食糧と環境とのかかわり（F(1,25)=3.89，p<.10)」では，婚姻経験有り群が無し群よりも有意に高い傾向がみられた。つまり，既婚教師の方が独身教師よりも，食糧と環境とのかかわりに関する学習の必要性を感じていた。また逆に,「33.消費者の権利と責任(F(1,25)=3.10，p<.10)」と「34.クレジットのしくみと多重債務（F(1,25)=3.10，p<.10)」では，婚姻経験有り群が無し群より有意に低い傾向がみられた。既婚者よりも独身者の方が，自分自身が自由に使えるお金が多いことから，消費行動への関心が高いことが推察される。

生活設計の学習に関する自由記述をみると（表５参照)，婚姻経験有り群では,「目標をもち，計画的に生活していくこと」「ライフステージにおける発達課題」「ワーク・ライフ・バランスの重要性」などの記述であり,「お金のこと（短期，長期，経済計画)」と記述した教員は１名であった。これに対して，婚姻経験無し群では,「金融教育」「資産運用と家計管理」「働くことの大切さ」「経済設計について」などの記述であった。

婚姻経験無し群の方が，働くことの大切さや経済計画に対する関心が高く，そうした教師の生活経験が，消費者の権利と責任やクレジットの利用に関わる学習の必要性を感じている要因であることがうかがえる。

3.3. 子育て経験と学習指導観との関連

つぎに，子育て経験と学習指導観についてみる。表４に示したとおり，子育て経験有り群は13名，子育て経験無し群は14名であった。

学習指導観については,「26.衣文化（F(1,25)=4.71，p<.05)」「32.給与明細の見方（F(1,25)=4.97，p<.05)」「34.クレジットのしくみと多重債務（F(1,25)=4.30，p<.05)」の項目において，

表４　婚姻経験・子育て経験・介護経験の有無別にみた学習指導観

	学習項目	婚姻経験			子育て経験			介護経験		
		有り群(N=18)	無し群(N=9)	t 検定	有り群(N=13)	無し群(N=14)	t 検定	有り群(N=7)	無し群(N=20)	t 検定
家族・家庭	1.自分をみつめること	3.50	3.44	ns	3.69	3.29	4.95+	3.57	3.45	ns
	2.自分らしく生きること	3.44	3.44	ns	3.54	3.36	ns	3.57	3.40	ns
	3.家族の多様性	3.33	3.33	ns	3.31	3.36	ns	3.14	3.40	ns
	4.ﾜｰｸ・ﾗｲﾌ・ﾊﾞﾗﾝｽ	3.39	3.22	ns	3.31	3.36	ns	3.14	3.40	ns
	5.男女共同参画社会	3.28	3.33	ns	3.31	3.36	ns	3.57	3.20	ns
	6.ジェンダー	3.17	3.11	ns	3.08	3.21	ns	3.29	3.10	ns
	7.生活設計	3.33	3.22	ns	3.31	3.29	ns	3.29	3.30	ns
保育	8.妊娠や出産のしくみ	3.50	3.78	ns	3.62	3.57	ns	3.71	3.55	ns
	9.避妊や人工妊娠中絶	3.28	3.67	ns	3.38	3.43	ns	3.71	3.30	ns
	10.子どもの成長・発達	3.56	3.56	ns	3.54	3.57	ns	3.57	3.55	ns
	11.社会みんなで子育て	3.72	3.44	ns	3.77	3.50	ns	3.71	3.60	ns
	12.愛情をもって育てる	3.67	3.67	ns	3.69	3.64	ns	3.71	3.65	ns
福祉	13.高齢者の特徴と生活	3.28	3.56	ns	3.23	3.50	ns	3.43	3.35	ns
	14.高齢者の介護	3.17	3.33	ns	3.00	3.43	ns	3.14	3.25	ns
	15.支えるしくみ	3.39	3.44	ns	3.23	3.57	ns	3.57	3.35	ns
食生活	16.栄養のバランス	3.67	3.44	ns	3.62	3.57	ns	3.43	3.65	ns
	17.食品の選択や管理	3.61	3.56	ns	3.54	3.65	ns	3.57	3.60	ns
	18.自分で調理ができる	3.78	3.78	ns	3.68	3.86	ns	3.71	3.80	ns
	19.食糧と環境	3.61	3.22	3.89+	3.54	3.43	ns	3.43	3.50	ns
	20.食文化	3.33	3.33	ns	3.23	3.43	ns	3.14	3.40	ns
衣生活	21.被服の素材や性能	3.16	3.33	ns	3.08	3.36	ns	3.29	3.20	ns
	22.洗濯などの被服管理	3.50	3.44	ns	3.38	3.57	ns	3.29	3.55	ns
	23.衣服の簡単な補修	3.72	3.56	ns	3.62	3.71	ns	3.57	3.70	ns
	24.自分で衣服を縫製	2.44	2.56	ns	2.31	2.64	ns	2.29	2.55	ns
	25.被服資源と環境	3.11	3.11	ns	2.92	3.29	ns	2.71	3.25	5.18*
	26.衣文化	2.78	2.89	ns	2.54	3.07	4.71*	2.43	2.95	3.30+
住生活	27.住まい方の計画	2.94	2.89	ns	2.92	2.93	ns	2.43	3.10	7.78**
	28.室内環境整備と管理	2.89	3.22	ns	2.77	3.21	ns	2.86	3.05	ns
	29.安全な住まい方	3.00	3.22	ns	2.85	3.29	ns	2.86	3.15	ns
	30.住まいと環境	3.00	3.22	ns	2.85	3.29	3.09+	3.00	3.10	ns
消費生活	31.家計管理や資産運用	3.06	3.33	ns	2.92	3.36	3.90+	3.43	3.05	ns
	32.給与明細の見方	3.00	3.22	ns	2.85	3.29	4.97*	3.14	3.05	ns
	33.消費者の権利と責任	3.33	3.78	3.10+	3.31	3.64	ns	3.43	3.50	ns
	34.クレジット･多重債務	3.33	3.78	3.10+	3.23	3.71	4.30*	3.57	3.45	ns

※学習項目は略記　　+p<.10　*p<.05　**p<.01

子育て経験有り群より子育て経験無し群が有意に高いことがわかった。有意傾向がみられた項目は「1.自分をみつめること（F(1,25)=4.95，p<.10)」「30.住まいと環境（F(1,25)=3.09，p<.10)」，「31.家計管理や資産運用（F(1,25)=3.90，p<.10)」であり，「1.自分をみつめること」以外は，子育て経験有り群よりも無し群の方が，学習指導の必要性をより感じていることが明らかになった。子育て経験有り群に対して無し群の方が，消費生活分野に対する学習指導の必要性を強く感じているという結果は，婚姻経験無し群の方が婚姻経験有り群よりも有意に高い傾向がみられた結果と類似していた。

そこで，「家庭科の授業を通してとくに生徒に学んでほしいこと」の記述をみると（表６参照），つぎのような特徴が明らかになった。子育て経験有り群では，「豊かでよりよい生活を営むことができるために必要な基礎知識と，学んだことを生活の中で生かすことができる実践力」「幸せで健康な家庭を培う力」など，よりよく生きることやより豊かな生活をしていこうとする態

表５　生活設計の学習目標（自由記述より抜粋）

婚姻経験有り群	婚姻経験無し群
・家族と生活時間や，生活設計を考える力を学んで欲しい ・ライフステージにおける発達課題 ・ワーク・ライフ・バランスの重要性 ・目標をもち，計画的に生活していくこと ・学校を出た後の仕事，家庭，家族とどうしていけばいいのかを気付かせたい ・生活設計を考える ・消費者問題や消費者の権利と責任 ・ライフプランと同様に，短期の目標も大切であるということ ・よりよく生きるためには，見通しをもって取り組むことが大切なこと ・お金のこと（短期，長期，経済計画）	・金融教育 ・資産運用と管理 ・正社員として，働くことの大切さ ・働くことの大切さ ・経済設計について ・自立について

表６　家庭科の授業を通してとくに生徒に学んでほしいこと（自由記述より抜粋）

子育て経験有り群	子育て経験無し群
・健康維持増進のための衣食住を学び，生活力を学んでほしい ・豊かでよりよい生活を営むことができるために必要な基礎知識と，学んだことを生活の中で生かすことができる実践力 ・家庭生活の大切さ（家族や保育） ・生活力を身に付ける ・自分の人生について考える ・計画，実行できる能力のもとを作りたい ・自分を客観的に分析して，よりよく生きること ・自立と思いやりをもって人生を送る技術を家庭科で学んだことを少しでも生かしてほしい ・真の意味で自立し生きていく力．幸せで健康な家庭を培う力 ・自立した人間になるため，生活の中の問題を主体的に解決出来るよう，とくに「食育」．毎日，適当な食事をしたり，外食したりという生徒の声を聞き，体調を崩したり，精神的に不安定な子も見られる．「栄養」以前にとにかく「食」に関心をもち，自分の体をしっかりつくり，守れるように学ばせたい ・よりよく生きる，生活していこうとする態度 ・基本的な生活に関する知識・技術，ｼﾞｪﾝﾀﾞｰフリーな考え方や背景，家族の多様性，ワーク・ライフ・バランス	・自分の生き方，在り方を見つけられればよい ・自分の生活（将来の生活を含め）をよりよく自立するための知識・スキル・実践的態度（安全，環境，科学など） ・情報に流されないで，自分の信念をもって生活スタイルをつくる力 ・自立し，一人暮らしができること（一人で食事が作れる，栄養バランスがわかる，衣服の簡単な修理ができること他） ・自分の将来を考えられる ・自分が主体的に生活を作っていくという意識や実際の生活力．大人になっても自立出来ない人（とくに男性）が多く，不幸な家庭や社会を継続して作っているので，一人一人が心身を働かせて行動できることが必要である ・自立した生活のための技術や知識 ・生きる力を身に付けさせたい ・自立して生活していく力．人とのかかわり ・生きる力を身に付けてほしい ・いろいろな事柄に関して自分の考えをもつ．自立できるノウハウ．他者とのコミュニケーション力 ・自分の考えをしっかり持ち，生活のいろいろ場面で表現する力．生命を大切にする心 ・食生活・衣生活の基本的な知識や技術をしっかりと身に付けてほしい ・人生をよりよく営んでいくためには，家庭生活が大切であるということ ・自分で考え，行動する力．本当の味（だし，素材など）を知り，調理する力

度を育成することが多く記述されていた。一方，子育て経験無し群では，「情報に流されないで，自分の信念をもって生活スタイルをつくる力」「自立し，一人暮らしができること」「自分の将来を考えられる」など，「自立」というキーワードが散見され，自立することを教科目標に置いている様子がうかがえた。

また，生活設計の学習目標の設定理由に関する記述をみると（表７参照），子育て経験有り群では，「自分の生活や家族の生活を見直しながら，現在や将来の生活を見つめ，考えることができるように教えたい」「目標や展望をもって計画を立てて生活することの大切さや，そのためにはワーク・ライフ・バランスが重要であることを考えさせたい」などであった。一方，

表７　生活設計の学習目標の設定理由（自由記述より抜粋）

子育て経験有り群	子育て経験無し群
・自分の生活や家族の生活を見直しながら，現在や将来の生活を見つめ，考えることができるように教えたい ・目標や展望をもって計画を立てて生活することの大切さや，そのためにはワーク・ライフ・バランスが重要であることを考えさせたい ・先を見据えて生活する大切さを教えたい ・社会に出てから一番困ることだと思うので. ・自分の卒業後の進路，将来への目的意識をしっかりもってほしい ・精神的・社会的に自立してほしい.	・生活設計の大切な要素 ・どのように将来を生きるか，大切である ・社会に貢献しつつ，自分の自己実現をはかることが大切であるから ・フリーターでもよいという考え方の生徒もいるが，様々な不利益があることを知って欲しい ・経済観念をつけさせたい ・生きていく上で，とくに重要 ・生活を支える収入の確保や先を考えた支出は大切だし，生活の基盤，お金がなく，修学旅行に行けない，進学できないという生徒を見ていると，その必要性を強く感じるから

子育て経験無し群では，「社会に貢献しつつ，自分の自己実現をはかることが大切であるから」「フリーターでもよいという考え方の生徒もいるが，様々な不利益があることを知って欲しい」「経済観念をつけさせたい」などであった。

家庭科の教科目標の特徴と同様に，生活設計の学習においても，子育て経験有り群は，家族関係やワーク・ライフ・バランスにみられる生活時間の学習に重点をおき，子育て経験無し群は経済生活や働くことに重点をおいていた。教師の生活経験の背景の違いが，両群の視点の差異と関連していることが示唆される。

3.4. 介護経験と学習指導観との関連

つぎに，介護経験と学習指導観について検討する。表４に示したように，介護経験有り群は7名，介護経験無し群は20名であった。介護経験に関連する学習項目である福祉分野の項目では統計的有意差がみられなかった。高齢者の学習に関する記述においても，両群に差異はみられなかった。

両群において統計的な有意差がみられた項目は「27.住まい方の計画（$F(1,25)=7.78$, $p<.01$）」「25.被服資源と環境（$F(1,25)=5.18$, $p<.05$）」，有意傾向がみられた項目は「26.衣文化（$F(1,25)=3.30$, $p<.10$）」であり，介護経験有り群より介護経験無し群の方が，学習指導の必要性を強く感じていた。このうち，「26.衣文化」は婚姻経験無し群の方が婚姻経験有り群よりも有意に高い傾向がみられた項目である。衣食住のモノに関する学習項目についてみると，介護経験有り群の平均が3.07，介護経験無し群の平均が3.30で，１％水準で統計的有意差がみられた。介護経験無し群の方が介護経験有り群よりも，衣食住の学習指導の必要性を強く感じているといえる。

つまり，婚姻経験や介護経験といった人間関係にかかわる生活経験が少ない教師は，家族や保育，福祉などのヒトに関わる学習指導よりも，衣食住などのモノに関わる学習指導に重きを置く傾向があるのではないかと推察される。

3.5. 教師のキャリア志向と学習指導観との関連

教師のキャリア志向について，「消費経済などの講義の指導内容に関すること」「調理・被服などの実習の指導内容に関すること」「グループワークやロールプレイングなどの指導法」「ICT活用など情報機器を使った指導法」「他の教師の授業実践を聞く」「他の教師がどんな教

材を使っているのか知る」の６つのことがらに対する教員研修に対する意欲を，年代別にみたところ，図１のような結果が得られた。すべての項目で平均値2.5以上の回答が得られたことから，教師の教員研修に対する意欲が高いことが示唆される。

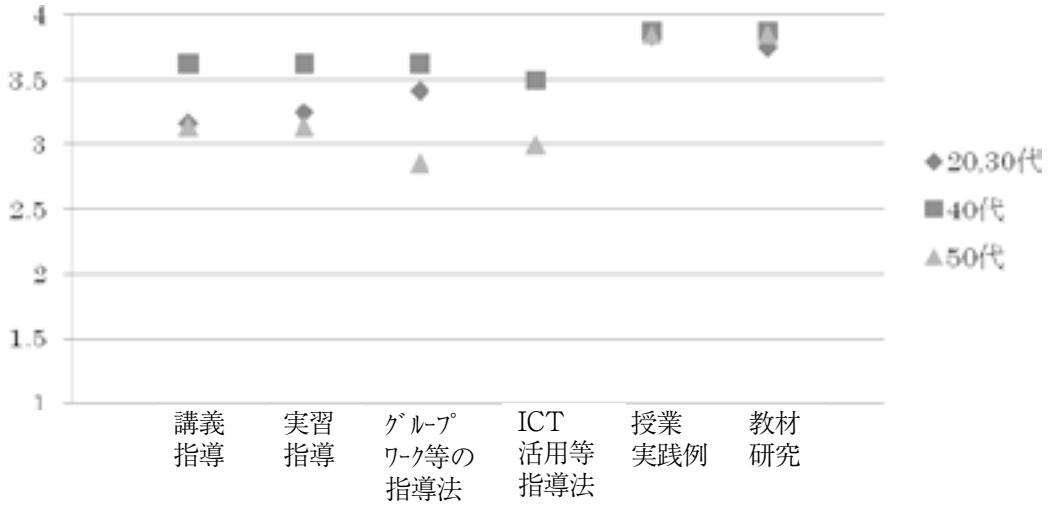
分散分析の結果，「グループワーク等の指導法」の項目において，1％水準で統計的有意差がみられた（F(2,24)=3.69，p<.01)。多重分析を行った結果，30代以下と40代の間では相関関係はみられなかったが，30代以下と40代の意欲に比べ，50代の意欲が5％水準で低いことが明らかになった。

つぎに，各教師の教員研修に対する意欲を得点化し，研修意欲が高い群と低い群に分けて，学習指導観との関連を検討した。研修意欲に関する得点のばらつきは24点から16点であり，22点以上を高群（10名），21点以下を低群（17名）とした。

平均教員歴をみると，高群は19.7年，低群は20.2年で，両群の間にほとんど差異はみられなかった。

表８に示したとおり，ほとんどの項目において，研修意欲が低い群は高い群よりも，学習指導の必要性を感じていなかった。とくに統計的有意差がみられた学習項目は，「6.ジェンダー(F(1,25)=9.03，p<.01)」「14.高齢者の介護（F(1,25)=10.02，p<.01)」「15.高齢者を支えるしくみ（(F(1,25)=4.75，p<.05)」「28.室内環境の整備と住まいの維持管理（F(1,25)=5.54，p<.05)」「31.家計の管理や資産運用（F(1,25)=13.15，p<.01)」であり，いずれも研修意欲が高い群の平均値の方が高かった。上記の学習項目はいずれも専門的な知識を要する項目であると考えられる。教員研修は，生活経験だけでなく，一生活者としての知識を得たり，価値観を構築する上で有効な手立てである。したがって，自己のキャリアアップを図る意欲が高い教師ほど，学習指導に対してその必要性を感じているといえる。

また，全体として学習指導の必要性が低かった住生活分野についてみると，研修意欲が高い群と低い群に有意差がみられた。研修意欲が低い群ほど，住生活に関する学習指導の必要性を感じていなかった。住生活分野の学習指導については難しさを感じている教師が多い。それに対して，教師自身の力量向上性の低い教師は，自らの知識不足を認識するにとどまり，向上性



※４件法で回答　４：とても必要，３：まあ必要，２：あまり必要ではない，１：必要ない

図１　年代別にみた教師の教員研修に対する意欲

表８　教師のキャリア志向と学習指導観

	学習項目	高群 (N=10)	低群 (N=17)	t 検定
家族・家庭	1.自分をみつめること	3.40	3.53	ns
	2.自分らしく生きること	3.50	3.41	ns
	3.いろいろな家族，家族の多様性	3.40	3.29	ns
	4.ワーク・ライフ・バランス	3.50	3.24	ns
	5.男女共同参画社会	3.40	3.24	ns
	6.ジェンダー	3.50	2.94	9.03**
	7.生活設計	3.50	3.18	3.31+
保育	8.妊娠や出産のしくみ	3.50	3.65	ns
	9.避妊や人工妊娠中絶	3.40	3.41	ns
	10.子どもの成長・発達	3.80	3.41	3.07+
	11.社会みんなで子育てをしていくこと	3.80	3.53	ns
	12.愛情をもって子どもを育てること	3.80	3.59	ns
福祉	13.高齢者の心身の特徴と生活	3.60	3.24	ns
	14.高齢者の介護	3.70	2.94	10.02**
	15.高齢者を支えるしくみ（制度，支援）	3.70	3.24	4.75*
食生活	16.栄養のバランス	3.60	3.59	ns
	17.食品の選択や管理	3.60	3.59	ns
	18.自分で調理ができること	3.80	3.76	ns
	19.食糧と環境とのかかわり	3.50	3.47	ns
	20.食文化	3.30	3.59	ns
衣生活	21.被服の素材や被服材料の性能	3.30	3.18	ns
	22.洗濯などの被服管理	3.70	3.35	ns
	23.衣服の簡単な補修	3.90	3.53	4.21+
	24.自分で衣服の縫製ができること	2.40	2.53	ns
	25.被服資源と環境のかかわり	3.20	3.06	ns
	26.衣文化	3.00	2.71	ns
住生活	27.間取りと住まい方の計画	3.10	2.82	ns
	28.室内環境の整備と住まいの維持管理	3.40	2.76	5.54*
	29.防災など安全な住まい方	3.40	2.88	3.47+
	30.住まいと環境のかかわり	3.40	2.88	4.15+
消費生活	31.家計の管理や資産運用	3.60	2.88	13.15**
	32.給与明細の見方	3.20	3.00	ns
	33.消費者の権利と責任	3.60	3.41	ns
	34.クレジットのしくみと多重債務	3.70	3.35	ns

+p<.10　*p<.05　**p<.01

が高い教師は自らが努力して指導方法を工夫するなどの状況がみられる[7]という先行研究の結果と同様に，本研究においても，教師のキャリア志向と学習指導の必要性との間に関連が見られた。

４．まとめと今後の課題

本研究の目的は，高等学校家庭科教師を対象に意識調査を実施し，教師のライフコースと家庭科の学習指導観との関連を明らかにすることである。

得られた結果は，以下のとおりである。

（１）年代別にみると，家族・家庭分野において，30代以下では家族の機能や家事労働，40代では自分で創っていく家族や家族の大切さ，50代では個と家族や現代家族の諸問題など，年代によって家族を扱うテーマの視点に差異がみられた。また，高齢期に最も遠い30代以下の教師は高齢者の特徴や高齢者を支えるしくみに主眼を置いていたが，50代の教師

は，高齢者としての生き方や生き甲斐の作り方などを学習目標に掲げており，年代による教師の生活経験の差異が学習指導観に反映されていた。

（2）婚姻経験が有る教師は，生活設計の学習指導において，ワーク・ライフ・バランスやライフステージにおける発達課題など，生き方に関する内容を多くあげていたのに対して，婚姻経験が無い教師は，経済設計や家計管理，働くことの大切さなど経済生活に関する内容に重きを置いていた。

（3）子育て経験が有る教師は，家庭科の教科目標として，よりよく生きることやより豊かな生活をしていこうとする態度を育成すること，子育て経験が無い教師は自立することに重点を置いていた。

（4）婚姻経験や介護経験といった人間関係にかかわる生活経験が少ない教師は，家族や保育，福祉などのヒトに関わる学習指導よりも，衣食住などのモノに関わる学習指導を重視する傾向があることがわかった。

（5）自己のキャリアアップを図る機会である教員研修に対する意欲が高い教師ほど，より多くの項目に対して学習指導の必要性を感じていた。

最後に，本研究では教師の学習指導観に焦点をあてており，教師の学習指導観がどのように実際の授業に反映されているのかは明らかにされていない。限られた家庭科の授業時数における学習項目の授業時数の配分，各学習項目の目標設定や使用教材など，教師の学習指導観と授業実践とのかかわりを明らかにすることが今後の課題である。

なお，本稿は，日本学術振興会科学研究費補助金（若手研究（B））「教師の生活価値観が生活設計教育の学習指導内容に及ぼす影響に関する実証的研究」（課題番号21730702）の助成を受けて行われた研究の一部である。

参考・引用文献

1）ウォルター・ディック他著・角行之監訳，はじめてのインストラクショナルデザイン，ピアソン・エデュケーション，2007

2）稲垣忠・鈴木克明，授業設計マニュアル，北大路書房，2011

3）文部科学省，高等学校学習指導要領解説家庭編，開隆堂，2010

4）高木幸子，家庭科教員養成における模擬授業実践を取り入れた教育法プログラムの検討（第１報），日本家庭科教育学会誌第49巻第4号，pp.256-267，2007

5）鶴田敦子・荒井紀子・原澤智子，男女共学家庭科の実施と教師の意識（第2報）生活主権者意識と家庭科観をめぐって，日本家庭科教育学会誌第41巻第2号，pp.41-48，1998

6）入江和夫・永原朗子，教師の家庭科観－山口県の小・中・高校教師の場合－，日本家庭科教育学会誌第39巻第3号，pp.7-12，1996
鎌田浩子，小学校家庭科教育の担当者の家庭科観と指導の実態，日本家庭科教育学会誌第42巻第1号，pp.1-8，1999

7）植田真理子・小澤紀美子，中学校・高等学校における住まいの教育に関する研究－家庭科教師の意識と授業実践を中心として－，東京学芸大学紀要総合教育科学系第57巻，pp.367-374，2006